

学 位 論 文 要 旨

氏 名 佐々木 新

題 目 学校教員や心理専門職になり得る大学生を対象とした性的マイノリティに関する教育のあり方に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文は序論（第1章）、文献的検討（第2章）、研究1（第3章）、研究2（第4章）、研究3（第5章）の実証的研究、及び総合的考察（第6章）における理論的、教育実践的議論から構成されている。

序論（第1章）においては、性的マイノリティの心理社会的課題及び近年の学校教育における性的マイノリティへの対応の変化を概説し、性的マイノリティの児童生徒に関する公的調査及び関連する先行研究を踏まえ、学校教育における性的マイノリティへの対応に係る課題を整理した。将来の学校教育やその支援を担う可能性のある大学生を対象とした教育機会が限られていることやその効果も十分に明らかになっていないことから、本研究では当該大学生を対象とする性的マイノリティに関する教育とその効果について検証し、養成教育上の知見の蓄積を目的とすることを述べた。

文献的検討（第2章）においては、性的マイノリティに対する理解や態度の改善に向けた介入研究の既報から国際的な動向を示した。その結果、医療専門職や学校教育関係者等を対象とした多様な介入において、性的マイノリティに関する知識や技能的側面の改善は複数の研究で認められるが、好悪等生の感情的な側面も含む態度の改善は必ずしも一貫した結果ではなかった。専門職者やその学生は性的マイノリティについて学ぶ時、自らの職業的立場を意識した学習となり、性的マイノリティを日常生活上の人間関係とは異なる距離感を持って認識する可能性を考察した。専門職者や教員を目指す学生を対象とした介入をを、性的マイノリティが日常生活における身近な存在であることと捉えることができる有効な介入方法を見出すことは困難であった。

研究1（第3章）では、学校教員や心理職になり得る大学生における性的マイノリティへの態度の実態の把握とその態度と関連する要因を明らかにすることを目的として、大学生を対象とした質的調査を実施した。その結果、大学生の性的マイノリティに対する態度の実態は比較的肯定的であること、それらの態度は知人という実在をもつてこのこと、性的マイノリティに関連する文章や映像にかかわる接触経験等と有意に関連するところ、過去の経験によるリキラムにおいては性的マイノリティに関する教育の機会が限られていること、比較的容易に実施でき、かつ有効な内容や方法を検討することの必要性を考察した。

研究2（第4章）では、当事者の事例にも接触する機会を含む大学教員による講義の効果の明らかになることを目的として、学校教員や心理職になり得る大学生を対象とした教育的介入とその態度の変化に関する検証を行った。その結果、大学教員による講義は性的マイノリティの心理社会的な困難さを印象づける効果は持ち得ることが明らかとなったが、それ以外の印象や関わることへの自己効力感、差別・偏見に関する態度の指標では有意な変化がなく、講義の影響が認められなかった。参加者は「性的マイノリティは社会的に不利な状況で気の毒だ。でもそれは致し方ない。」との心境に留まった可能性があり、講義の効果は限定的であると考えられた。

研究3（第5章）では、大学教員による講義に加え映画の視聴を含む介入の受講者への影響について検証した。その結果、性的マイノリティへの態度全般を改善する効果は認められなかったものの、知人がおらず自ら情報への接触やボランティア活動の経験がない参加者においては性的マイノリティが身近な存在である印象を向上させる効果が認められた。ただしこの介入においても、効果が認められたのは一部の参加者に限られたため、大学教員による講義に性的マイノリティを十分なストーリー性をもった情報で描写する映像の視聴を加えても、肯定的な印象の向上や差別・偏見の低減に効果的とは言いえないと考えられた。

総合的考察（第6章）においては、研究2及び研究3の介入の効果が限定的となった背景について欧米における教育的介入との比較、加えて、本邦における性的マイノリティ当事者による教育的介入との比較を行った。特定の活動や教授方法の有効性を検討した研究が乏しいことが指摘される中において、本研究では比較的实施しやすい形態と内容を実現しやすい時間帯の範囲で行う教育的介入の効果について検証できた点を踏まえ、この効果と限界について議論した。当事者参画による教育的介入の意義と課題を踏まえ、今後の検討課題を示した。